

上田（宗片）邦義会長喜寿祝いメッセージ

Celebratory Messages to UEDA (Munakata) Kuniyoshi, President of ISHCC, for His Seventy-Seventh Birthday

当学会の上田（宗片）邦義会長が本年11月に喜寿を迎えられます。以下に、いただいたお祝いのメッセージから幾つか紹介いたします。

■ お祝いの言葉 秋山正幸（国際融合文化学会顧問、日本大学名誉教授・元常務理事）

上田先生が喜寿をお迎えられたとのこと、まことにおめでとう存じます。

先生はいつも笑顔で人に接し、日ごろ若々しく、かつお健やかでいられますので、喜寿の祝いはまだ先のことだと思っていました。

先生は英語能『ハムレット』『オセロ』『リア王』などの作・演出をなされてきましたが、最近『ブライズ先生、ありがとう』という著作を上梓し、精力的に仕事をしてまいりました。私は先生のご活躍に大きな刺激をうけました。

実は、私の卒業論文の指導教授はブライズ先生でした。私の尊敬する恩師が天皇陛下の家庭教師であることは知っていたのですが、上田先生の著書を読み、私はブライズ教授が高邁な精神をもった教育者であり、俳句を世界に広めた学者であり、しかも世界の平和に身をもって貢献した人物であることを再認識した次第であります。

上田先生が、今後とも変わらぬ活力と若々しさで、国際融合文化学会会長として、後進の指導にあたり、英語能の研究・公演の活動を続けられることをお祈り申し上げ、喜寿の祝詞いたします。

■ 上田先生の喜寿を記念して 加藤義喜（名誉会員、日本大学名誉教授）

先生が喜寿を迎えられたこと、しかもますますのご健勝・ご発展のなかでのそれ、文字通り喜ばしきことと存じます。

先生には本誌『融合文化研究』とその母体の国際融合文化学会の誕生の場となった日本最初の通信制大学院である日本大学大学院総合社会情報研究科の創設段階で、ことに文化情報専攻の構築に重要な役割を果たしていただきました。当時、同研究科創設プロジェクトを主導していた私にとって文化情報専攻は（関心は大いにありますが）専門外であり、先生にはいろいろ相談に乗っていただいたことも懐かしい思い出の一つです。その後も先生には同専攻の中心メンバーとして教育指導していただき、ことに先生の学問・芸術のすばらしい成果である英語能と関連した内容を取り入れた、まさに融合文化的な、ユニークな教育は受講者の皆さんにとつ

でも実のある講座だったと思います。

もちろん、融合文化という現代社会においてきわめて重要な意義をもつ課題を正面から採り上げた本学会と本誌の狙いはたいへん結構です。と言ってもそれは単純に文化の融合合体が望ましいというわけではなく、それぞれの文化の長所なり特色なりを大事にし、保持しながらの融合だと思いますが。経済学畑の私ですが、ことに専門の国際経済分野でも市場経済の交流深化が却って各国の文化的特色を目立たせ、また他国からそれぞれの長所を学ぶ機会を増やすというプラス効果も出ています。私自身、(ここ二、三十年ほど前までは的格な、あるいは適格な評価はされませんでした) 風土論的な分析を含めてこうした文化的要因をとり入れた研究をしており、先生から本学会の参与を頼まれた際も喜んで引き受けた次第です。それだけでなく、先生から寄稿を依頼されて、文化的・学際的な内容の比較的長い論文を2編ほど載せさせていただきました。今後とも先生とともに本学会と本誌のますますの発展を祈っております。

■ お祝い 山崎有一郎 (能楽評論家、横浜能楽堂館長、1913年生まれ)

学者であり、研究家でありながら、なおかつ作者でもあり、演技者でもある上田教授には脱帽！ 初めてお誘いを受けた時は学者の「気まぐれ」、「お遊び」と思いヒヤカシ半分で出かけていき……驚かされました。真面目な人が真面目に作り、真面目に演じているのが「痛々しく」感じました。「いい人だな！」と思いました！

それでも私は、氏が学者であり研究者であり、作家であることは認めますが、「演技者」にはしたくありません、…。もっと客観的に舞台を見つめ、作家として「いいもの」を作ってください。お願いします。

■ 幾山河 奥村富久子 (名誉会員、観世流能楽師)

喜寿をお迎へになりました由、おめでとうございます。初めてお目にかかりましたのが、四十代後半の盛りのお年頃でいらっしゃいましたので、ああもうそんなにと、びっくり致しましたが、かく云う私も卒寿でございますから、改めてしみじみと年の矢の早さが思われます。

昭和五十六年「散る花の会」で私の「砧」をご覧いただいたのが御縁となり、「これは英国の人にも必ず解かる」とおっしゃって、昭和五十八年英国公演にお連れいただくことになりました。ロンドン公演(サドラズ・ウエルズ劇場)は千人を越す観客でしたので、宗片(上田)先生やジョージ・プラント教授の顔をつぶすことにならないかと心配でしたが、ハンカチを出して涙を拭う御婦人もあり、満席のお客様が最後まで熱心に観て下さり、会後のパーティーでは、劇場主任のレミントン氏が「満席になったのも嬉しかったが、大変いいものを観せていただき感動しました」と云って下さって、ほっとしたことでしたが、これも宗片先生の名訳があり、夫南條秀雄の協力があったのでございました。つづいて翌年も招かれ、皆様の御協

力をいたぐいて成功致しましたが、その翌年昭和六十年秋、思いもよらず南條が急逝致しましたので、私達夫婦にとりまして、この英国公演が最後の華やぎとなりました。

卒寿を迎えました今、夫や母、晨友、恩師との再会も、ほど近いことと思われませんが、それだけに名残りの年月を大切に、この世に脱ぎ捨てるボディはともかく、マインド、スピリット、を磨き上げて、「来ましたよ！」と手を振り、胸を張って素晴らしい再会を果たしたいものがございます。

先生もいづれはおいでになる所でございますから、ゆっくり此岸を楽しみました後に、彼岸へお渡りの節は、この世で御覧いたぐいた能よりは、いっそう魅力的な能（女性の特性を生かした能も考えております）を、お目にかけたいと思っております。

■ 見事な「融合文化」の結実にエールを 村松眞一（名誉会員、静岡大学名誉教授）

まず、今年喜寿を迎えられる上田邦義先生に心よりお慶びを申し上げます。

上田先生が刻んでこられた 77 年という年輪の厚みのなかで、とりわけ能シェイクスピア研究に傾けられた実践的才能と情熱には、端倪すべからざるものがあります。極めて保守的な古典芸能の様式にシェイクスピア作品を盛るという試みを、先生を措いて他に誰が出来たでしょうか。先生が静岡大学で行われた若き日の授業にも、テキストの綿密な読みに加え、早くから能仕立てが意図されておりました。その後学外・海外で試みられた数々の公演（その実績は本誌第8号川田基生氏の記事に詳しい）が積み重ねられて今日に至ったことを思えば、私はもう、感無量としか申し上げようがありません。近年の宮古島公演、東京公演においては、先生が主唱された融合文化としての「能シェイクスピア」が、多くの方々に支えられ、立派に結実したと言わねばならないでしょう。

第2次世界大戦後、外国文化主として英米文化が、わが国にどっと流入しました。以来 60 数年を経て、情報は電子的国際化によって雑然とあふれかえっています。言語文化だけに限って見てみても、消化不良化いっしょくたに混交・混用され、日本文化の質までが変わってきているのではないかと思わせるほどです。そんな中であって真に心の糧になる文化、そして後世にまで残る文化を考えてみたときに、浮かび上がってくるのが上田先生の「能ハムレット」や「能リア王」です。日本文化の本質を失わず、東西文化の融合がしっくりと調和し、なじんでいるからです。私はこれら能仕立てのシェイクスピア作品がガンダーラ美術のように、後世に残るものであることを信じて疑いません。

上田先生、どうぞ健康にご留意され、磨きがかかったこれら新作能によって、これからも私たちを啓発し、またその融合的精神を後進に伝えて下さいますように。

2011 年 8 月 村松眞一

■ 前人未踏の自作自演英語能 荒井良雄（名誉会員、駒沢大学名誉教授）

上田邦義博士が喜寿を迎えられた。功成り名遂げての七十七歳。おめでとうございます。

戦後の日本は、文化国家の標語をかかげて、世界が平和になることを祈念し、国際文化交流によって、さまざまな活動を展開してきました。

上田先生の英語能も、その一つであって、日本の文化史、演劇史、能楽史、英学史などの中に、永遠に残る「時の記録」として、詩語によって、刻印されています。

三十余年にわたる独立独歩の偉業は、「能リア王」の再々々演によって頂点に達しましたが、日本が長寿大国となった今、先生の創造力は衰えを知らず、英語能の家元として、生命ある限り、真善美の調和である新作能の創造で燃え尽きていただきたい。

学問と芸術に終りなし。(There is no ending in learning and art.)

■ 上田邦義先生の喜寿記念に寄せて 山田正雄（国際融合文化学会副会長）

このたび、＜国際融合文化学会＞会長の上田先生が喜寿をお迎えになられましたことに対しまして、心よりお慶び申し上げます。Congratulation! 先生は＜国際融合文化学会＞の設立のため大変尽力されて、2002 年秋の『融合文化研究』創刊号発行を経て、今日の学会の発展に至っています。これこそは、上田先生の研究者・教育者魂と永続的な熱意の実現であると確信します。今にして思えば、先生との最初の出逢いは、日本ソロー学会秋季全国大会で私が発表した平成元年のことでした。それ以来 23 年の歳月が流れ去りましたが、入洛されるたびに、先生から精神的激励を賜ったことを昨日のことのようによ憶すると、感謝の念を禁じえません。これからも、益々お健やかに English Noh Performance Player としても爽やかにご活躍されますよう、心よりお祈り申し上げます。

■ マーカス・グランドン Marcus Grandon （静岡大学ほか講師、国際融合文化学会副会長）

I remember meeting Ueda-Sensei for the first time many years ago on the campus of Shizuoka University. He invited me into his office just after I had been hired to teach there. We had lunch together with one of his students. After lunch we found an empty classroom, and he asked me about some of my research and work in the Feldenkrais Method. He asked me to teach him something. I thought to myself, "What could I possibly teach this man?" He was already near retirement age and had so much experience, and I was fresh out of grad school. I decided to show him a Feldenkrais movement sequence. I shared it with him and he participated diligently with intrigue and wonder. As he did those movements I could see that he was very engaged and curious.

When it was over he looked up at me with his eyes shining, smiled and said, “OK, now I’ve learned something. Let me share something with you.” With that he showed me some dance steps and chanting for Noh Hamlet and how to unfold a Noh fan. That was my first real experience performing with Noh. When he found out that I was a shakuhachi player, he suggested that I someday perform in one of his productions. At the time I thought that impossible, and that he was just being kind and I could never do something like that.

Some time later, Ueda Sensei invited me to be a guest presenter at one of his Noh seminars. It was a wonderful weekend where we studied different aspects of Noh theatre with a group of people. How many of you have ever participated in one of his seminars? Following this, well, I’ve lost count of how many times we’ve worked together over the years. What’s amazing is that he does this kind of thing not only with me, but with innumerable others. The far-reaching nexus is as deep as it is wide.

I do remember one point in the mid-90’s where he asked me if he should have a personal homepage. I was very firm in my answer and strongly recommended he have one so that the world could find him and his Noh plays easily. What a surprise a decade later when I received an e-mail from him asking me about Bjork and her partner Matthew Barney who had contacted him via the homepage about working together on their movie! I was so excited for him to work with them for it had long been a grand dream of mine to work with Bjork, and here one of the people closest to me had the opportunity to do so! I urged him to accept her offer to collaborate, and he told me that he would with one condition. When I asked him what that was he said to me, “I will accept only if you agree to partner with me on the project, 50-50.” I was just floored. Here Ueda-Sensei gave me a chance to have one of my biggest dreams come true!

Ueda Sensei once told me that he considered me like a brother to him. That was a very special moment in my life since I don’t have an older brother in my family. I must say that those words meant the world to me here in my adopted home of Japan. My life has become infinitely richer over the years since I first met him in ways I never could have imagined.

For all this, well, words cannot adequately express my feelings. So, to you my dear brother, on this wonderful occasion, I want to say, “Happy Birthday and many more!” Along with a humble “Thank you” a thousand times over.

■ **To live in the present...** 竹内正人（事務局次長、日本工学院専門学校教師・立教大学文学部兼任講師）

上田先生、つつがなく喜寿を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。図々しい弟子だと思いでしょうが、先生の米寿、白寿・・・皇寿の折も、同様にお祝い申し上げる所存ですのでよろしくお願い致します。

十二年前のことです。大学院受験用の健康診断書を受取りに病院に向いた私は、深刻そう

な顔をした医師から診察室に入るよう言われました。彼は私にレントゲン写真を見せながら、たぶん肺癌だろう、と言うのです。もし癌なら長くて半年・・・ショックでした。病院からどうやって帰宅したのか憶えていません。

部屋のテーブルに置き放しだった大学院のパンフレットを何の気無しに捲っていると、「死」という文字が目にとまりました。

「能はこの世とあの世の橋渡しをする悟りの芸術となる。人を生死や時空を超えた意識の世界へと導く。死は肉体の死にすぎない」

心の騒擾は何事も無かったかのように治まりました。不思議でした。

精密検査の結果、幸い癌ではないことが判りましたが、人生と死についての回思は暫く続きました。

私は最初、大学院で心理学を学ぶつもりでした。仕事に役立てようと考えていたのです。心理学や行動科学は、たしかに人を救っています。しかし、心理学者自身が生死の狭間に立たされた時、この科学は彼を救うことができるでしょうか。私は、専攻を「人間科学」から（恐らく仕事の役には立たないであろう）「文化情報」に変え、研究計画書を作成し直しました。研究のテーマは「能における映像的表現」でした。当然、担当教授は上田先生です。

上田先生のもとで学び始めて直ぐに、人生と死についての問題は解決しました。

To be or not to be is no longer the question; A man's life's no more than to say 'one'. To be or not to be is not the question. The readiness is all. (宗片邦義著 1998 年「日英二ヶ国語による『能・オセロー』創作の研究」勉誠社)

Noh Hamlet のこの詞章を知った時、救われた気がして、涙がとまりませんでした。

この時に得た人生観の検証と上田先生への心酔が私の大学院生活の全てでした。

在学中に『能・ハムレット』からヒントを得て書いた物語が、小さな文学賞を頂きました。上田先生とゼミの仲間たちが祝賀会を開いて下さいました。その祝賀会の場で、国際融合文化学会の設立が決まりました。

「人は比較されることを好まない。動物だって嫌だと思っているはず。比較文化ではなく融合文化とすべきではないか」

上田先生が「比較文化・比較文学」の講義のなかで、「比較」というアプローチを否定されたことに驚きました。「比較文化・比較文学」ではなく「融合文化・融合文学」とすべきではないかというアイディアに、受講者は皆さん賛同されていたようですが、最も過激に賛同したのは私かと思います。

Much Ado About Nothing の 3 幕 5 場に、Comparisons are odorous. (比較は臭い) という頓珍漢な台詞があります。Comparisons are odious. (比較は不愉快) のマラプロピズムです。19 世紀フランスを中心に発展した分類と比較という自然科学的な学問の方法は、データベースの構築には寄与しましたが、各対象間の受容と影響を実証した後どうするのか、という目標を確立していなかったため、やがて欧州中心思想を助長しました。分類と比較は、いつの間にか

研究対象間の差別を生み、臭み odor どころか憎しみ odium を齎してしまいます。

コソボ紛争の報道に「民族浄化(Ethnic Cleansing)」という悍ましい言葉が頻出していました。「文化の分類」が「文化の比較」になり、ついには「民族の浄化」に至る短絡的な思潮の「文化の比較」を「文化の融合」にかえたらどうだろうか、「民族の共生」に繋がるのではないかと考えました。「比較」を「融合」と置き換えるだけで、世界は随分と変わるのではないかと思いますのです。

異種の文化の内に潜む文化の本質を捉え世界文化とは何かを明らかにする、という目標をもった新しい比較文化論でも、「世界文化とは何かを明らかにした後には？」と問われたとき、答えの出しがありません。「融合」も「共生」も、「人類の幸福につながる研究」を明確に志向し、「…何かを真に理解し、真に愛するためには、それを受け入れ理解した上で、” 乗り越える ” 必要がある」(P66 頁 cit) …といった積極的な実践を示唆しています。「融合」や「共生」を枠組みとした実践的な研究なら、中途半端な結論を出して終わることもありません。

上田先生のアイディアは、もっと穏やかなものであったかもしれません。何れにせよ、我々は先生を担ぎ上げ、「自己中心主義から解放された人々が、「高い意識」をもち、どのように自己を発揮したら周りの人々や外国の人たちに幸せや喜びを与えられるか、真剣に考え情熱を燃やす」(「死後のいのちを考える」 cit) …そんな学会を立ち上げました。西暦2000年の穏やかな春でした。

汲む人も汲まざるも延ぶるや千歳なるらん

面白の遊舞やな

■ 喜寿の祝い—文化の融合を想う— 菊地善太 (国際融合文化学会事務局長)

上田先生が喜寿を迎えられたことを、心よりお慶び申し上げます。社会人大学院の受験で初めてお会いしてから十年、変わらぬご指導ご鞭撻をいただき、感謝の念に堪えません。学業指導を受ける傍らで、ゼミ幹事や学会事務局長に任命され、学業のみならず様々なことを教えていただきました。本当にありがとうございます。

先生の英語能の謡と仕舞を初めて拝聴・拝見できたのは、大学院に入学したばかりの2001年5月の学会大会(京都)のときでした。大学院に入ってから初めて能に触れた私は、日本語の謡の聴き取りさえ覚束ない状況で、英語の謡なんてどうなるのだろうと思っていましたが、いざ聴いてみると、英語の単語が聴き取れたことに非常に驚きました。早口でまくし立てられる英語より、かえって聞きやすいくらいでした。また、能としての違和感は、全く感じられませんでした。

私たちは、文化交流という言葉をよく耳にします。異文化のものを視聴したり体験したりしたときに使われるように思います。私たちが来日劇団の公演を観たりするのは、それに当たるでしょう。日本人役者による翻訳劇を見た場合も、それに当たるように思えます。では、翻案

劇の場合はどうでしょう。黒澤明の映画「蜘蛛巣城」は、シェイクスピアの「マクベス」劇の翻案として知られますが、これは英国文化のものか、それとも日本文化のものか、答えに窮する人も多いのではないのでしょうか。私は、外国文化の要素と母国文化の要素が両方取り込まれ、どちらの文化の要素も簡単には無視できなくなった状態のものが、融合状態の文化と考えます。上田先生の英語能は、その最たるものでしょう。

それは、外国文化を受け入れるだけでは創造しえません。自国文化を発信するだけでは足りません。外国文化と日本文化を縦割りに考えられないところに融合文化はあり、共生世界の文化として、これから益々注目され、議論され、発展していくことでしょう。そこには、上田先生のリーダーシップが欠かせません。今後とも先生の一層のご活躍をお祈り申し上げます。